

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月 3日現在

機関番号：12601

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2011～2012

課題番号：23820014

研究課題名（和文） 古文書からみる日本語史—方法論の開拓と展開

研究課題名（英文） The history of Japanese studied through historical (non-literary) documents: development of the methods

研究代表者 永澤 済 (NAGASAWA ITSUKI)

東京大学・大学院人文社会系研究科・助教

研究者番号：50613882

研究成果の概要（和文）：

古文書は、文学作品等と比べ、日本語史資料としての研究が遅れている。本研究は、実用書記日本語の一級資料でありながら日本語研究の資料として用いられることが少なかった「古文書」による日本語史研究を企図した。主に中世古文書を資料とし、日本語学・言語学の枠を越え学際的に研究を進めた結果、その統語的特徴（語順・修飾構造等）や助動詞の用法等を明らかにすることができた。部分的ではあるが、正格漢文との異同についても分析し成果を得た。それら一連の研究をふまえ、古文書を日本語史研究に活用する方法と可能性についても考察を進めた。

研究成果の概要（英文）：

Historical documents and letters are important sources for studying the history of Japanese. However, few of them have been used for describing the history of Japanese. Literary documents have been attached more importance in it than non-literary documents like legal and political documents or letters. In this study I aimed to reveal new aspects of the history of Japanese through such non-literary sources. Medieval court documents issued by Kamakura Bakufu were the main source of this study. Most of the texts were written in Chinese characters, but modified with Japanese syntax and lexicon. They were carefully examined to investigate the influence of Japanese. Through this study I also considered the methodology to use historical documents and letters as a source of studying history of Japanese.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：人文学・日本語学

キーワード：日本語・古文書・変体漢文・文法・語彙・言語接触

1. 研究開始当初の背景

「古文書」は、実用日本語の一級資料でありながら、これまで、日本語研究の資料として用いられることが極めて少なかった。文学作品等と比べ、日本語史資料としての研究が遅れていた。研究方法自体が模索段階にあった。

古文書に現れる日本語は、古文書というジャンルの中で独自に展開した面と、同時代の他のジャンル（仮名文学、記録語等）と共通して展開した面の、両面をもつと考えられた。だが、古文書の語彙・文法・文体については、近代に至るまでの変遷過程も、他の文体との関係も未だ解明されていない部分が多かった。

これまで古代中世を中心に、語彙・語法面での成果が重ねられてきたが、語彙・文法・文体の総体を捉えるには至っていなかった。

「古文書学」を確立し発展させてきた日本史学においても、その語彙や文体の問題が正面から追究されることはなかった。そのような観点から、本研究は、日本語学・言語学のみならず、日本史学等の他分野にも資するものであることが見込まれた。

さらに、古文書の文体は、多くが変体漢文（漢字のみで書かれているが語順や語彙に日本語の影響がある）あるいは漢文訓読体で書かれており、中国の「文言」（漢文）と密接な関係にある。

その文体は、漢文と日本語との接触の結果成立したことは明らかであるが、どの部分に中国語の要素が残り、どの部分に日本語の影響がみられるかについては、未解明の部分が多い。他の地域にも、漢文と現地語との言語接触のケースがみられ、それらを、日本にお

ける接触のケースと比較することで、一般言語学的にも重要な成果が得られることが見込まれた。

2. 研究の目的

本研究は、実用書記日本語の一級資料でありながら、日本語研究の資料として用いられることが極めて少なかった「古文書」による日本語史研究を企図した。古文書は、文学作品等と比べ、日本語史資料としての研究が遅れている。本研究は、古文書を通して、従来の、文学作品偏重の研究の限界を乗り越え、日本語史の新たな側面を明らかにすることを目的とした。

次のことをめざした。

- ①研究の遅れが目立つ、統語面の言語学的分析。
- ②「日本古文書語彙辞典」作成のための語彙採集。
- ③古文書の文体バリエーションと、当時の社会的背景との相関関係—どのような社会的階層の人が、どのような教育（学問）を背景として書いたものなのか—の解明。
- ④〈中国の漢文と日本語との言語接触〉という観点からの日本古文書の検討—初期の古文書は漢文の流れをひくが、次第に、日本語の影響を受けた独自の文体が成立してくる。二言語の接触の結果、日本古文書独自の文法・文体がどのようにして生まれたのかを解明する。

3. 研究の方法

次のことを行った。

- ①主に中世の訴訟関係文書を調査対象とし、文法規則を記述した。
- ②「日本古文書語彙辞典」の作成基盤として、古文書語彙を収集した。
- ③古文書と異なるジャンルの実用書記言語資料（たとえば「御成敗式目」）と比較し、古文書の文体が、いかなる社会階層の書き手によりどのように成立したかを考察した。
- ④中国漢文と日本古文書の文法や語彙との相違点を検討した。
- ⑤日本語史研究に有用な古文書資料の収集を行った。また日本古文書の言語学的利用方法と可能性について考察を進めた。

4. 研究成果

【2011年度】

2011年度は、古文書のなかで、特に日本式漢文の分析に重点を置いた。瀬野精一郎編纂『鎌倉幕府裁許状集』におさめられた裁許状を一通ずつ読み進め、文法や語彙に関する分析を進めた。

日本式漢文において独自に発達した助動詞「令」、補助動詞「置」の用法について、共起動詞や表す意味を詳細に調査し、その用法や機能を明らかにした。

また、日本式漢文の統語構造（連体修飾構造、副詞の連用修飾のパターン、主語・目的語の取り方、前置詞〔「於」「為」「以」等〕の用法、「[名詞]有之」の「とりたて」用法、等）について分析を行い、成果を得た。以上について、論文として発表する準備を進めている。

あわせて、日本で独自の発展を遂げた漢文（日本式漢文）が、近代に至るまでにどう変遷したかを考察した。また変遷の過程で、日本語の口語とどのように関わっていたのか、という観点から研究を行い、資料収集を進めた。

また、古文書資料の収集とその言語学的利用法の開拓という観点から、沖縄・北九州にて調査を行い、琉球における言語接触・庶民の言葉に関する有益な資料を得ることができた。同じく、ドイツにて資料を閲覧し、近代に日本から渡った文献資料の中に、書かれた当時の口語を反映する興味深い資料が存在することがわかった。

【2012年度】

2012年度は、前年度から引き続き『鎌倉幕府裁許状集』所収の裁許状を主な資料とし、分析を進めた。

本年度特に重点を置いたのは、正格漢文と日本式漢文の、文法面における異同を明らかにすることであった。

日本式漢文とは、漢字のみで書かれながらも文法や語彙に日本語の影響がみられる漢文で、日本語史や言語接触の観点から興味深い言語資料である。

分析として、裁許状一通一通にあたり、統語的特徴（語順・修飾構造等）や助動詞の用法等が、いかなる点で正格漢文と共通し、いかなる点で異なっているのかを用例に即して検討した。

用例を網羅的に調査する必要がある場合には、電子データを用いて用例を収集し、数量的分析を行った。

前年度の成果をまとめるにあたり、各文書の文脈をより詳細に特定する必要が生じた。そのためには、当時の時代的特性、社会的状況、成文法、慣習、裁判制度など、文書中には必ずしも明示されない背景知識が不可欠

であった。よって、言語学・日本語学の枠を越え学際的に研究を進めた。日本史・法制史学等の研究成果にあたるとともに、各分野の研究者の協力を得て、各古文書の内容を正確・精密に把握することに重点を置いた。

以上の成果は公表の準備を進めている。

日本式漢文の研究と並行し、仮名文書（主に鎌倉時代）の言語学的活用についても考察を進めた。それらが当時の口語を反映した貴重な言語資料であることを再確認した。同時に、文書中の語が何を指すものかを特定することが今後の重要な課題であると認識した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計0件）

〔学会発表〕（計0件）

〔図書〕（計0件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

永澤 濟 (NAGASAWA ITSUKI)

東京大学・大学院人文社会系研究科・助教

研究者番号：50613882

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：